

群 教 七	F09 - 01
	平21.241集

# 学校と家庭の連携にかかわる研究

— 「新しい保護者会」を活用・発展させた

子育て学習プログラムづくりと実践を通して —

長期研修員 田中 克久

## 《研究の概要》

本研究は、学校と家庭の連携を深めるために、「新しい保護者会」を活用・発展させ、学校と家庭で子どもを「共に育てる」という視点に立った子育て学習プログラムを作り、実践研究するものである。この実践が、学校と家庭の連携を深める手だてとして有効であるかを明らかにし、また、実践を通して見えてきたことから、連携ポイントを整理し提言するものである。

**キーワード** 【学校と家庭の連携 新しい保護者会 共に育てる 子育て学習プログラム】

## I 主題設定の理由

家庭における教育は、子どもの基本的な生活習慣や倫理観、自律心や自制心、社会的なマナーなどを身に付ける上で重要な役割を担っている。しかし、家庭を取り巻く社会状況の変化で教育力に格差があることが指摘されている。

子どもの成長を支えることは学校だけでは困難である。家庭の協力が不可欠であるが、教育力に格差がある現在、学校の現状は、子どもたちへの指導に行き詰まり、家庭との連携を強く求める教師は少なくないと考えられる。

このような状況下、平成18年12月に改正した教育基本法、また、本県平成21年度学校教育の指針は、学校と家庭の連携の重要性にふれ、連携を深めていくために各学校で工夫して取り組むことが方針として示された。

協力校の小学1年生は、学校が好きで、楽しく勉強や運動に楽しく取り組んでいるようである。しかし、担任教師は、「成長させたいところがあり、家庭の協力が必要である」と、家庭との連携で課題を感じていることを聞き取り調査で明かした。さらに、担任教師は、保護者が「どうしてよいかわからない、なかなか思うようにいかない」と、子育てに悩みを抱えている様子についても明かした。子どもの成長を支えるには学校と家庭が連携することが必要であり、学校は、このような保護者に対して、子育てについて学び合う「機会」や「場」を設ける必要があると考える。

そこで、本研究は、家庭との連携に課題を感じている協力校の小学1年担任教師と保護者を主な

対象として実践することとした。学校と家庭が、学校教育の入り口に立ったこの時期に、子どもを「共に育てる」という考えで連携を深めていくことは大切である。

群馬県総合教育センターは、平成15年度より、学校における保護者会の1つのモデルとして「新しい保護者会」について研究し取り組んできた。「新しい保護者会」は、参加者から「来てよかった」と好評であり、これまでに成果を上げてきた。保護者同士が、子育てについて学び合う「機会」や「場」として最適である。

そこで、さらに「新しい保護者会」を活用・発展させ、学校と家庭で子どもを「共に育てる」という視点に立った子育て学習プログラムを作り実践研究することを考えた。本研究で取り組む「新しい保護者会」が、学校と家庭の連携を深めるために有効な手だてとなることが明らかになり、また、実践を通して見えてきたことから、連携を深めるポイントを整理し提言することができれば、家庭との連携に課題を感じている学校現場にとって価値あるものと考え本主題を設定した。

## II 研究のねらい

学校と家庭が、子どもを「共に育てる」という視点に立った子育て学習プログラムを作る。それを基に実践する「新しい保護者会」は、学校と家庭との連携を深める上で有効であるかを明らかにする。また、実践を通して見えてきたことから連携ポイントを整理し提言する。

### Ⅲ 研究の見通し

#### 1 「新しい保護者会」の実践について

保護者と教師が、「子どもの成長を支える効果的なかわり方」について、共に考え、共に作り出す子育て学習プログラムを作り実践する「新しい保護者会」は、学校と家庭の連携を深める有効な手だてとなるであろう。

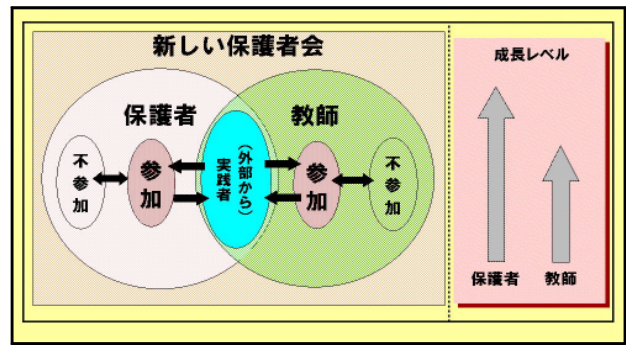


図2 本研究における「新しい保護者会」

#### 2 連携を深めるポイントについて

実践を通して見えてきたことから連携ポイントを整理し提言することができるであろう。

### Ⅳ 研究の内容

#### 1 基本的な考え方

##### (1) 「新しい保護者会」とは

「新しい保護者会」とは、家庭教育の支援と充実を目的に、群馬県総合教育センターが取り組んできたものである。平成18年度には、「体験型の子育て学習プログラム15」（図書文化）が刊行されている。これまでの「新しい保護者会」は、図1で示したように、対象者が主に保護者で、保護者同士の学び合いを大切にされた子育て学習プログラムにより実践されてきた。

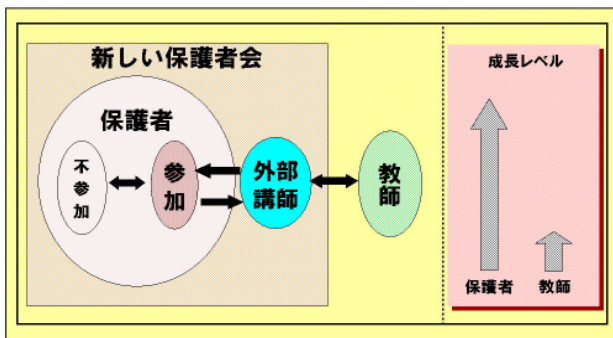


図1 これまでの「新しい保護者会」

##### (2) 「新しい保護者会」を活用・発展させるといこと（これまでの「新しい保護者会」とのちがい）

「新しい保護者会」を発展・活用するとは、まず、図2で示したように、対象者に教師も加わり、保護者と一緒に学び合う形態を取り入れるということである。また、子育て学習プログラムの内容に、学校と家庭で、子どもを「共に育てる」という視点に立った、つまり、「子どもの成長を支えていくにはどのようなかわり方が効果的か」を、教師と保護者が共に考える、共に作り出す活動を取り入れることである。

##### (3) 子育て学習プログラムづくりをどうすすめるか

学校と家庭の現状は、「一方向的な関係、心理的な距離が遠い」と言える。現状を見直し段階的に、「双方向的な関係を築き、心理的な距離を近づけ、さらに深めていく」ことが求められる。そこで、図3に示したように、各子育て学習プログラムを作る際に、実践者の意図として「連携視点」を設け、それぞれの保護者会で生み出したい「理想とする連携の在り方」をイメージしながら子育て学習プログラムづくりを行う。

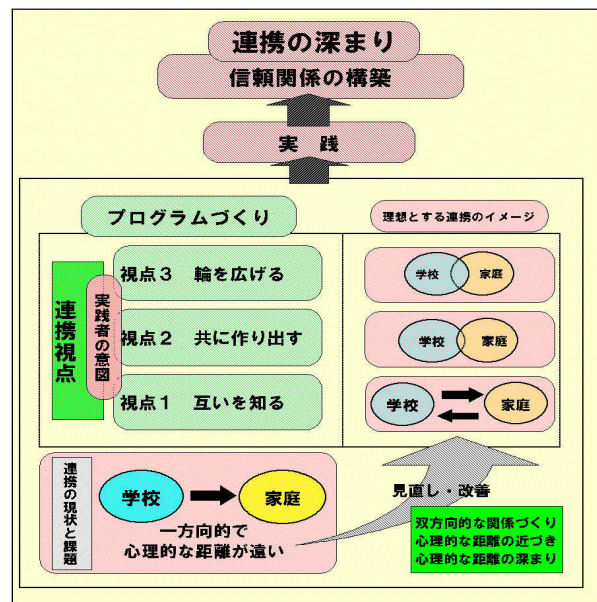


図3 連携を意図した子育て学習プログラム

##### (4) テーマの設定

教師は聞き取り調査から、保護者は図4に示したアンケート用紙を活用してそれぞれの実態を明らかにする。

図4 アンケート用紙

それを受けて連携視点を基にした実践者の意図、保護者と教師が抱えている悩





図5 テーマ設定までの流れ

みや願いから共通性を見いだしテーマを設定することが必要である。テーマ設定までの流れを図5に示す。

(5) 学びを共有すること

厳しい社会的な状況などから、「新しい保護者会」にすべての方が参加するという事は困難であることが予想される。しかし、参加できた方だけの学びにとどまることなく、参加できなかった方も学びを共有できるように、実践後におたよりを作成し配付する。作成する際には下記の点に留意する。

○ 留意点

- ・ 文字は大きく親しみやすい字体で書く
- ・ 学習内容を、端的にわかりやすく書く
- ・ 保護者会で得た学びを伝える
- ・ 見て楽しいイラストカットや保護者会の様子を伝える写真を活用する

2 研究構想図

本研究の構想を図6に示す。

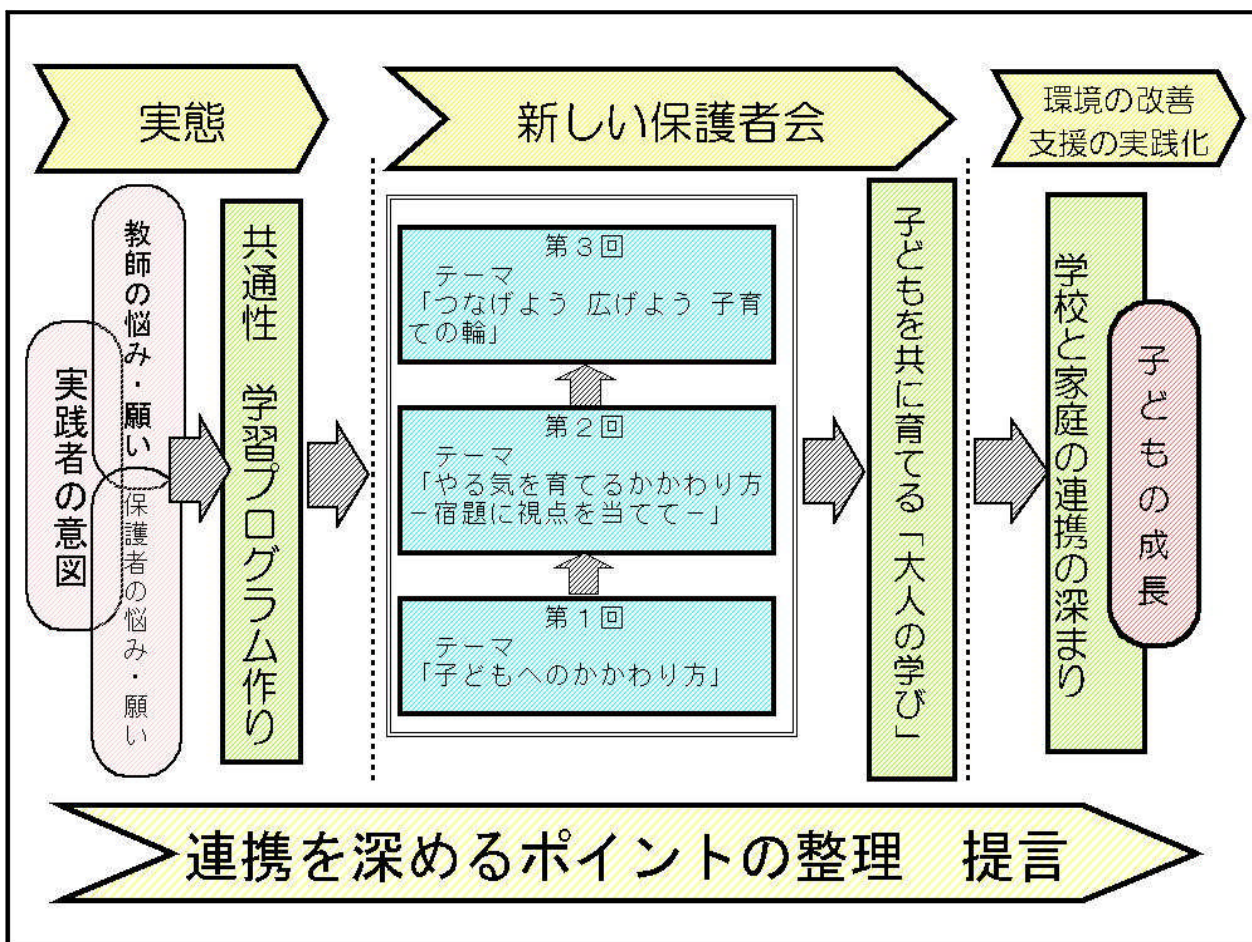
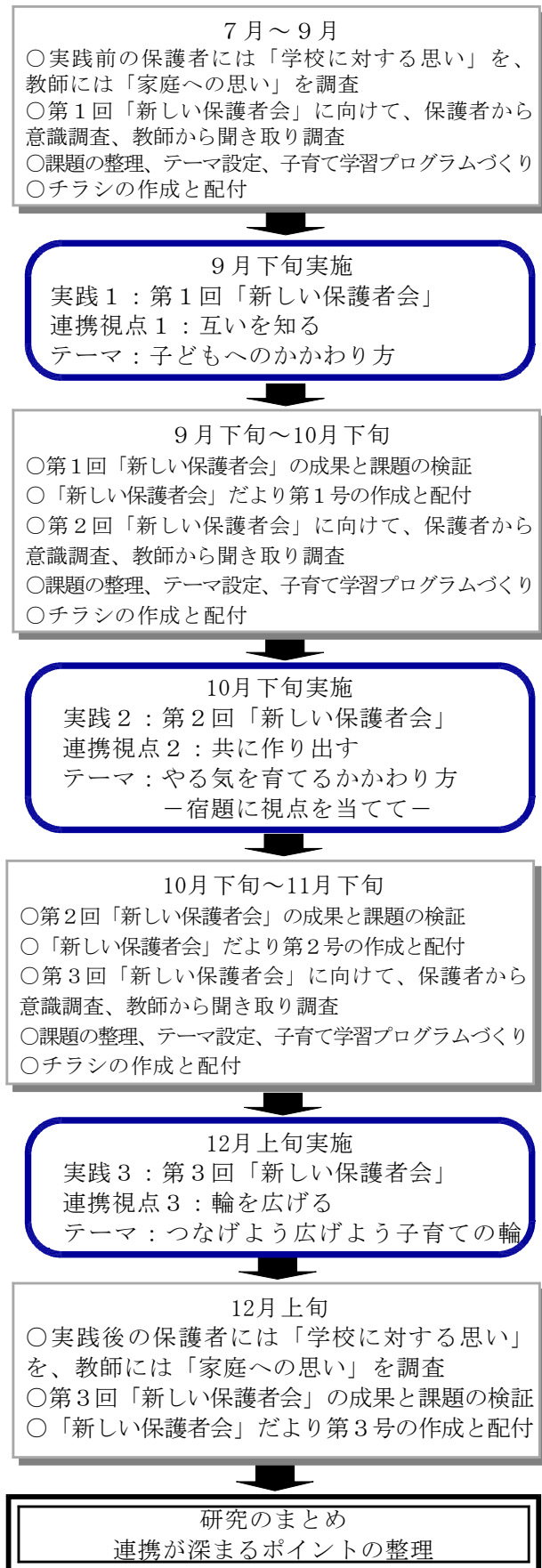


図6 研究構想図

### 3 検証計画

#### (1) 実践計画



#### (2) 検証計画

見通し1、2に対して下記の観点及び方法で検証する。

見通し1	
保護者と教師が、「子どもの成長を支える効果的なかかわり方」について、共に考え、共に作り出す子育て学習プログラムを作り実践した「新しい保護者会」は、学校と家庭の連携を深める有効な手だてとなるであろう。	
観 点	方 法
・子どもの成長を支える効果的なかかわり方を、保護者と教師が共に考え、共に作り出す子育て学習プログラム内容であったか。	・参加人数の推移。 ・保護者会後の振り返りシートの読み取りや聞き取り調査。
・実践前と比べて、実践後に保護者と教師に心情の変化があったか。	・実践前、実践後のアンケート調査及び聞き取り調査。

見通し2	
実践を通して見えてきたことから連携ポイントを整理し提言することができるであろう。	
観 点	方 法
・実践を通して、保護者が学校に対してどんな思いを抱いているか、また、教師にどんな新しい気づきがあったか。	・保護者会後の振り返りシートの読み取りや聞き取り調査。 ・実践前、実践後のアンケート調査及び聞き取り調査。

### V 実践

#### 1 実践1(第1回「新しい保護者会」)

##### (1) テーマの設定

「テーマ設定までの流れ」(図5)に基づいて、今回のテーマを「子どもへのかかわり方」として実践を行った。詳細については図7に示す。



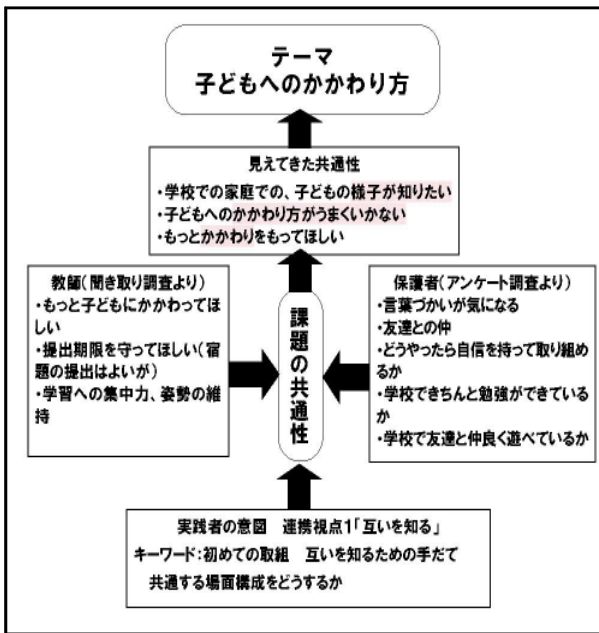


図7 第1回「新しい保護者会」テーマ設定までの流れ

(2) 活動

① 導入

協力校では、「新しい保護者会」が初めての取組であるため、アイスブレイキングに十分に時間を取り、2つのエクササイズを行った。

- エクササイズ1：後出しジャンケン
- エクササイズ2：「となりのとなり」で自己紹介

② 展開

ア 活動1

T1、T2の役割演技を見て子どもの気持ちに触れる。

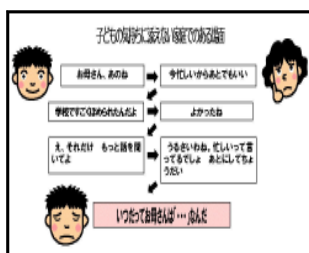


図8 家庭での場面

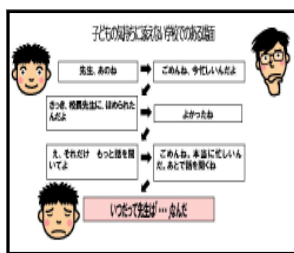


図9 学校での場面

○ 参加者の反応

図8、図9のような家庭でも学校でもよくみられる場面を役割演技した。参加者から「家庭でも学校でもこういうことあるよね」、「子どもに申し訳ないね、かわいそう」などのつぶやきがあった。子どもの気持ちに十分に触れることができる身近な場面設定であった。

イ 活動2

子どもの気持ちにこたえられる効果的なかわ

り方を考えて役割演技をする。

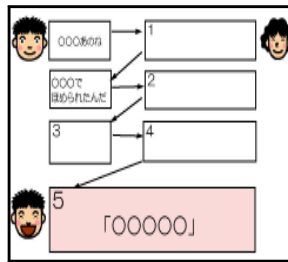


図10 ワークシート



図11 参加者との役割演技

○ 参加者の反応

図10のワークシートを活用し「子どもの気持ちにこたえられる効果的なかわり方」について考えた。なかなか思うように書けない保護者から「ワークシートに沿って書けなくてもいいですか」という質問を受けたので、「自由な発想で考えて書いてください」と答えた。するとたくさん書くことができた。その後、図11のとおり参加者とT1で「効果的なかわり方」について役割演技をすると、「それいいですね」「家で使ってみよう」などのつぶやきがたくさんあった。

③ 終末(参加者の振り返りシートから)

保護者A  
先生は、たくさんの子どもの指導で「大変だなあ」とあらためて思いました。

保護者B  
先生方も参加してくれてとても楽しい保護者会でした。もっと先生方とコミュニケーションが深まるといいなと思います。

教師A  
家庭での様子が伺えてよかったです。子どもへの効果的な励まし方が勉強になりました。

保護者から、「楽しかったから次回は友達を連れてきます」との声が聞かれた。初めての試みということで、参加者は、始めは緊張でこわばっていた表情であったが、終わったときには笑顔で、保護者と教師の垣根を越えて会話をしている姿が見られた。

(3) 学びの共有

大人は、「親にかかわりたい」「大人に認められたい」という子どもの素直な気持ちに対して、忙しさのあまり子どもの気持ちにこたえられないことがよくある。今回はそんな子どもの気持ちにこたえられる「ちょっとしたほめ方の工夫」や「スキンシップの工夫」について考えることができた。図12はその学びを伝えるために作成し配付したおたよりの一部である。

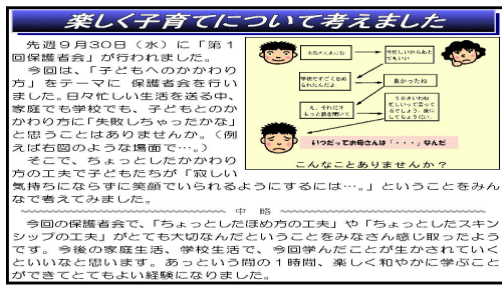


図12 第1回「新しい保護者会」だより(一部を抜粋)

#### (4) 実践から見てきたこと

「子どもの気持ちに触れる」ために、家庭と学校の、互いの生活によくみられる場面について役割演技をした。参加者は、それぞれの様子が分かり満足感を得た。実践終了後に、保護者から「もっと学校での生活について知りたい」また、教師からも「家庭での様子をもっと知りたい」という話が聞かれた。今回の実践ではお互いの生活の様子を知ることから互いの立場を理解することができ心理的な距離が近付いたと考える。今回の実践から、学校と家庭の連携を深めるには、情報を共有することが大切であることが見てきた。

## 2 実践2(第2回「新しい保護者会」)

### (1) テーマの設定

「テーマ設定までの流れ」(図5)に基づいて、今回のテーマを「やる気を育てるかかわり方ー宿題に視点を当ててー」として実践を行った。詳細については図13に示す。

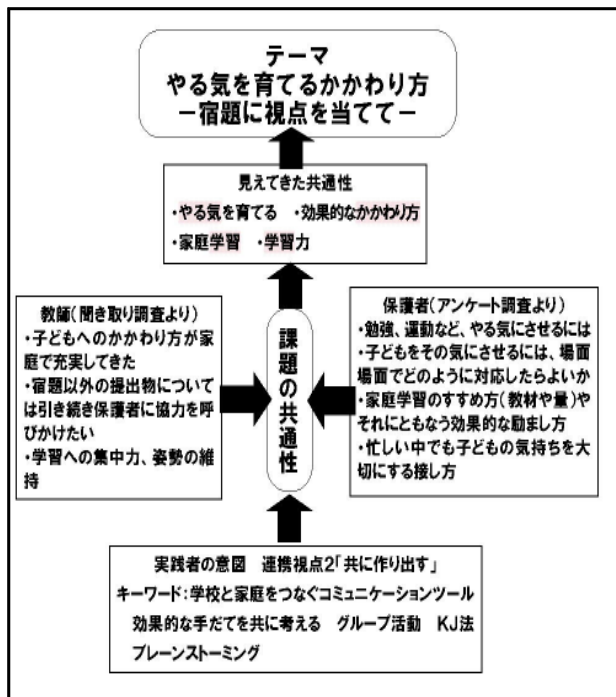


図13 第2回「新しい保護者会」テーマ設定までの流れ

## (2) 活動

### ① 導入

今回は、参加者一人一人について「自分のことをもっと知ってもらおう」というねらいでアイスブレーキングを行った。ネームプレートの裏面を利用して、「私の趣味は…」とか「私の小学生の頃の夢は…」などのリード文の後に文を書いてもらい、誰の自己紹介文かを当てるクイズ形式で自己紹介を行った。

○ エクササイズ:「私は誰でしょう」で自己紹介

### ② 展開

#### A 活動1

T1、T2の役割演技を見て、宿題の持つ意義や目的・ねらいについて考える。

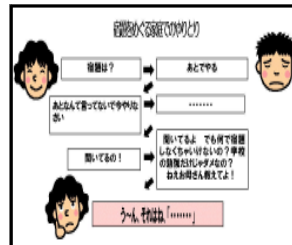


図14 家庭での場面



図15 学校での場面

### ○ 参加者の反応から

前回と同様に、図14、図15のような場面を設定して役割演技をした。役割演技後に、「宿題ってなんですかね」と問いかけると、参加者から「学力の定着や向上」という答えが返ってきた。T1が「実は、宿題には親子のコミュニケーションや人間形成にも効果がある」と参加者に話すと、「宿題って大切なんだね」とか「宿題を自主的にこなせることが大切だね」というつぶやきがあった。宿題の重要性を知る効果的な活動であった。

### イ 活動2

やる気を育てるかかわり方を考え、「やる気を育てるかかわり方シート」をみんなで作る。

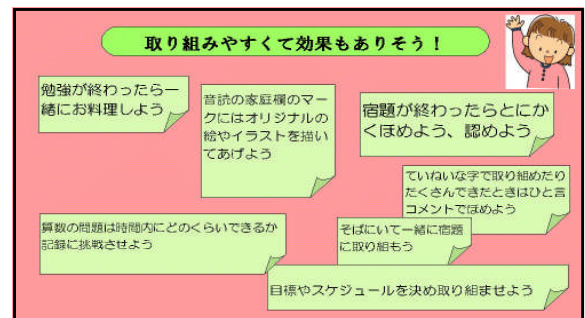


図16 やる気を育てるかかわり方シートのまとめ(一部を抜粋)

### ○ 参加者の反応から

参加者一人一人が、経験を基に「やる気を育てる効果的なかわり方」をたくさん考えた。シートにまとめる場面では、「それ効果あるよ」、「家に帰って早速試してみよう」など、一人一人の意見に対して盛り上がりを見せた。シートにまとめられた「効果的なかわり方」（図16）は今後の子どもの成長を支えるために参考になる提案がたくさんあった。

### ③ 終末(参加者の振り返りシートから)

**保護者A**  
先生方が、宿題について、私たちと一緒に考えてくれてとてもうれしかったです。

**保護者B**  
子どものやる気を育てるための、今すぐにでもできることがたくさんありました。また一つ子育てのヒントになることを学ぶことができました。

**教師A**  
家庭で真剣に取り組んでいることが分かりました。家庭のことを考えて、これからは宿題の出し方を工夫したいと思います。

保護者会が始まる前から、保護者と教師が笑顔で会話をする和やかな雰囲気があった。アイスブレイキングでさらにお互いの心理的な距離が近付いた。保護者会終了後に、「先生も一人でたくさん宿題をみるから大変ね」「家庭でも真剣に取り組んでいることが分かって安心しました」という保護者と教師の会話が聞かれた。互いの立場を理解し子どもを「共に育てる」という意識が感じられる活動であった。

### (3) 学びの共有

宿題は、学力の定着や向上を目指すだけのものだけではなく、親子のコミュニケーションや人間形成に効果的であることを学んだ。宿題に取り組むということは「大人になるためのトレーニング」であり、とても大切な取組であることをみんなで共通理解することができた。図17はその学びを伝えるために作成し配付したおたよりの一部である。

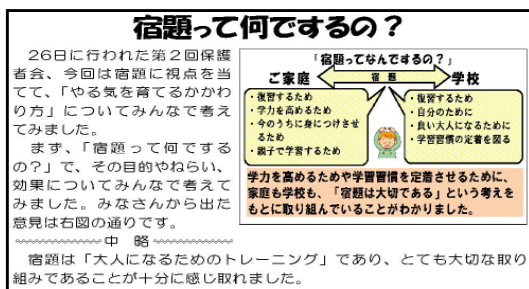


図17 第2回「新しい保護者会」だより(一部を抜粋)

### (4) 実践から見えてきたこと

実践終了後に、参加者から「とても楽しかった」との声が聞こえた。教師も保護者も、共に考え作り出すという経験がこれまでにあまりない。保護者からは「先生と一緒に考えてくれるなんて初めての経験、とてもうれしかった」「先生が私の考えを分かってくれた」、教師からは「保護者の考えが分かったことで、これからの指導に生かせる」「保護者の気持ちが分かった気がする」などの話が聞けた。今回の実践では互いの考え方に共感することができ、心理的な距離に深まりがあったと考える。学校と家庭の連携を深めるには、相手の立場に立って物事を考えることが大切であるということが見えてきた。

## 3 実践3(第3回「新しい保護者会」)

### (1) テーマの設定

「テーマ設定までの流れ」(図5)に基づいて、今回のテーマを「つなげよう広げよう子育ての輪」として実践を行った。詳細については図18に示す。

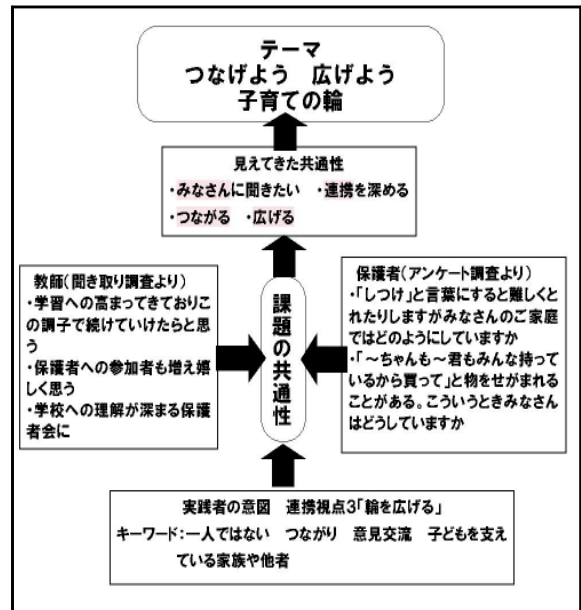


図18 第3回「新しい保護者会」テーマ設定までの流れ

### (2) 活動

#### ① 導入

今回、全体に対して7割の参加があった。多人数で楽しくコミュニケーションを図りながらできるゲームを考えアイスブレイキングを行った。

○ エクササイズ: バースデーチェーン

#### ② 展開

##### ア 活動1

子どもの成長について一人一人考え、それを基



にグループで話し合う。



図19 グループで話し合い



図20 子どもの成長について

### ○ 参加者の反応から

一人一人に、入学してからこれまでの子どもの成長について振り返った中では、「あらためて言われるとなかなか書けないな」というつぶやきが聞こえた。しかし、グループになって話し合う中で(図19)、「そう言えばうちの子もそういうところ成長したかも」と気付いたり、「～ちゃんはこういうところが成長してるよ」と教えたりすることができた。図20で示したように、保護者の交流やつながりは、子どもの成長を支える上でとても大切なことに気付ける有意義な活動になった。

### イ 活動2

子どもの成長にかかわる家族と他者について考える。

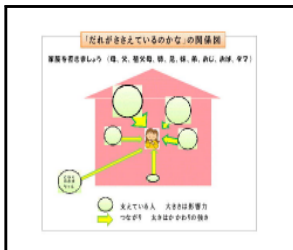


図21 ワークシート

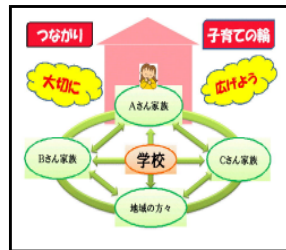


図22 輪を広げる重要性

### ○ 参加者の反応から

図21のワークシートを活用し、子どもの成長を支えているのは家族だけでなく、たくさんの人々に支えられていることに気付くことができた。子どもの成長を支えている他者の一人として「先生」と書いた保護者がいて、連携が深まったことを実感できた。また、活動2のまとめに、図22に示した資料を使って、学校と協力して子どもの成長を支える必要性について話をしたところ、「そうだよね」とうなずく保護者が多数見られた。学校と家庭の連携の深まりを実感できる活動であった。

### ③ 終末(参加者の振り返りシートから)

#### 保護者A

「新しい保護者会」を通して、新たにお母さん方、先生方とも知り合えて、自分の世界が広がったように思います。

#### 保護者B

子育てで悩んでいるのは私だけではないということが分かりました。たくさんの方々とお話できて少し気持ちが楽になりました。

#### 教師A

家庭とつながることが大切だと思いました。これからも家庭と協力して子どもの成長を支えていきたいと思っています。

保護者から、「もう保護者会はないのですよね、さみしいです」、「こういう保護者会であればまた参加します」、「先生方と触れ合えて自分の世界が広がった」などの話が聞けた。これまでにかかわりが少なかった保護者との交流、先生方と親しく話げた喜びなど、子育ての輪が広がり学ぶことが多い保護者会になった。参加者は「来てよかった」という満足感を得たようである。

### (3) 学びの共有

保護者同士のつながりを大切にすることは、子どもの成長を支える大きな力になることが分かった。また、子どもの成長を支えているのは家族だけでなく、地域の人々、そして学校の先生などたくさんの人々に支えられているということにも気付けるよい学びとなった。図23はその学びを伝えるために作成し配付したおたよりの一部である。

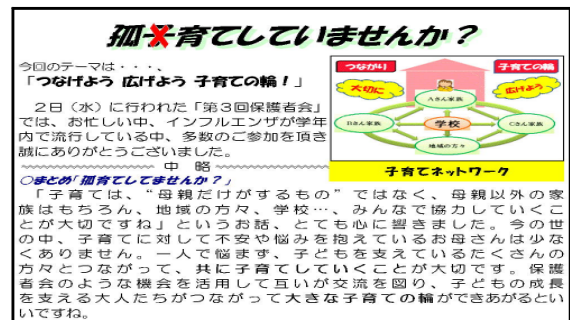


図23 第3回「新しい保護者会」だより(一部を抜粋)

### (4) 実践から見えてきたこと

たくさん参加者から「ぜひ、またこういう機会を設けてください」と意見があった。「新しい保護者会」のよさを実感したようである。先生と話げたことに喜びを感じた保護者が多かった。保護者は「先生と話がしたい、触れ合いたい」と考えている。今回の実践から、学校と家庭の連携を深めるには、教師は積極的に保護者に話しか



けるなど、保護者と触れ合うことが大切であることが見えてきた。

## VI 結果と考察

1 子どもを「共に育てる」といった新しい視点に立った子育て学習プログラムを基に実践した「新しい保護者会」は、学校と家庭の連携を深める有効な手だてとなったか

### (1) 参加人数の推移から

図24は保護者の参加人数の推移である。保護者の参加者人数が回を追うごとに増えた。その理由として、「和気あいあいと楽しく学べる」という評判が口コミで広がったことや、おたよりを通して学びの共有が図れたことが上げられる。学校の新しい取組に興味・関心が高まり、子どもを「共に育てる」という意識が高まったことが考えられる。

教師は、実施時間が3回とも授業時間内であったことから、他学年の担任教師の参加は困難であった。たくさんの教師が参加できるためには、実施時間の持ち方が課題である。

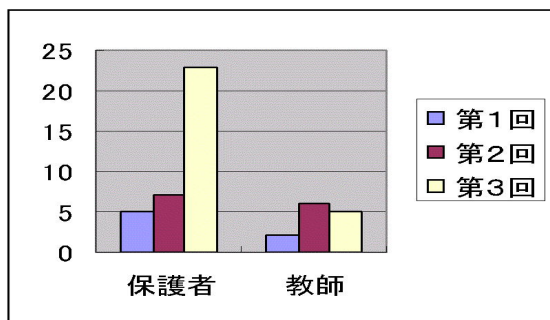


図24 保護者会の参加人数

### (2) 実践前、実践後の意識の変容から

#### ① 保護者のアンケート及び聞き取り調査から

□実施前の学校への思い  
 ・重い雰囲気 ・何事も事務的 ・親身でない  
 ・先生との距離感がある ・面倒

■実施後の学校への思い  
 ・すごく身近に感じるようになった  
 ・先生方の苦勞に共感できた  
 ・親と変わらず、先生も常に子どものことを考えてくださっていることが分かりよかった

上記の結果から、学校に対する保護者の心理的な距離が近付き関係が深まったと言える。保護者が教師の苦勞を共感したり、親と変わらず子どものことを考えていることを理解したり、立場を認め理解する心情的な変化が見られた。

#### ② 教師のアンケート及び聞き取り調査から

□実施前の家庭への思い  
 ・子どものかかわりが足りない  
 ・提出物の回収が思うようにいかないのが困ることがある。指導に生かせない

■実施後の家庭への思い  
 ・家庭で、子どもに真剣にかかわってくれていることが分かり安心した  
 ・教師の役割を超えて共感できた

上記の結果から、教師は家庭での様子が分かり、保護者が子どもに真剣にかかわっていることを理解できた。教師の役割を超えて共感できたということは、相手の立場に立って物事を考えることができるようになった証であり、実践後に「よりにくい」「きめ細かい」子どもへの指導として表れた。

以上の結果から、教師も保護者も、お互いの立場を認め理解し合えたことが分かる。学校と家庭の心理的な距離が近付き、さらに深まった。「新しい保護者会」は学校と家庭の連携を深める有効な手だてと言える。

## 2 連携を深めるポイントについて

各実践を通して、連携を深めるポイントが見えてきた。これらを「『新しい保護者会』を実践する際にどのように生かすか」について「VII 成果と課題 1 成果 (1)」に示す。

## VII 成果と課題

### 1 成果

#### (1) 連携を深めるポイント

各実践から見えてきた連携を深めるポイントを下記に示す。

- 実践1 情報を共有すること
- 実践2 相手の立場に立って考えること
- 実践3 触れ合うこと

見えてきた3つのポイントを「新しい保護者会」を実践する際にどう生かすかについて述べる。

#### ① 実践1「情報を共有すること」

保護者は「学校の様子が分かったこと」、教師は「家庭の様子が分かったこと」に価値を見出した。学校と家庭とをつなぐものとして、おたよりの連絡帳等で、子どもの様子や子どものよさについて発信したり、また、家庭から、生活の様子や保護者の考えを受け取ったりすることが大切である。「新しい保護者会」を実践するには、日

頃のやりとりを大切にしながら、子どもの成長を支える学校と家庭の課題をつかむことで、双方がより身近な課題としてとらえることができる考える。

### ② 実践2「相手の立場に立って考えること」

学校と家庭で、共に作り出していくには、信頼関係の下、相手の考えに触れ、受け入れることが大事である。保護者は「先生と一緒に考えてくれた」「先生が分かってくれた」、教師は「保護者の気持ちが分かり指導に生かせること」と感想を述べ、心理的な距離がさらに近付き連携が深まるのに効果的な実践であった。今回は、学校と家庭をつなぐものの中から宿題に視点を当てて実践したが、各学校の実情に合わせて題材を選び、「共に作り出す子育て学習プログラム」を展開していくことが大切であるとする。

### ③ 実践3「触れ合うこと」

実践3の保護者の振り返りから、教師と話ができたことに喜びを感じた保護者が多かった。保護者は「教師と話がしたい、触れ合いたい」と考えている。しかし、その機会に恵まれないのが現状であり、子育て学習プログラムに教師と保護者が意見交流をする活動、子育てにかかわる保護者のネットワークづくりを意図的に取り入れることが大切であるとする。

#### (2) 「子育て学習プログラム」の作成

実践者が、保護者・教師の悩みや願いを受けて「新しい保護者会」の子育て学習プログラムづくりを行った。それぞれの立場や役割を理解し、子育て学習プログラムを作成した。これらは、相手の立場に立って考えることで、相互理解が深まり、信頼と尊敬が生み出されていく。作成した子育て学習プログラムは資料として別に掲載する。

## 2 課題

### (1) 体験的な活動の充実

短時間で、体験活動、意見交流の時間を十分に確保することは困難であった。体験することで新しく気付いたり、意見交流をすることで「悩んでいるのは自分だけではない」という安心感が与えられたりする。活動の中でじっくりと取り組ませたい部分を焦点化した子育て学習プログラムの活用が必要である。

### (2) 学校と家庭の連携推進役の養成

学校と家庭の連携を深めるための手だてとして「新しい保護者会」は有効であることが分かった。今後さらに連携を深め、教師と保護者が相互成長していくためには、図25で示すように教師自らが実践する「新しい保護者会」に発展させること

が望まれる。そのためには学校と家庭の連携推進役となる教師を養成していくことが必要とされる。

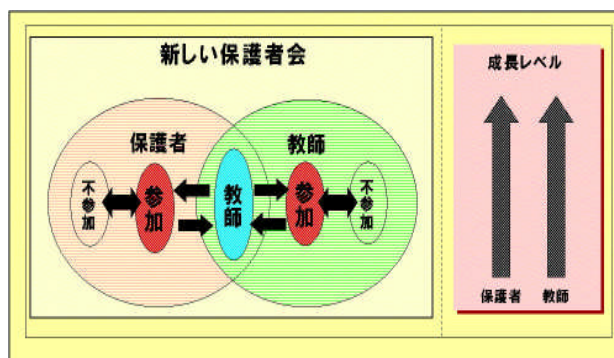


図25 教師がつくる「新しい保護者会」

#### 〈参考文献〉

- ・群馬県総合教育センター 著 『体験型の子育て学習プログラム15』 図書文化 (2006)
- ・斉藤 秀一 『学校と保護者の連携を深める新しい保護者会の在り方』 群馬県総合教育センター平成17年度長期研修員研究報告書225集 (2005)
- ・志水 宏吉 編著 『教育のエスノグラフィー』 嵯峨野出版(1998)
- ・佐藤 郁哉 著 『フィールドワークの技法』 新曜社(2002)
- ・石戸 教嗣 著 『教育現象のシステム論』 頸草書房(2003)
- ・安田 雪 著 『ネットワーク分析』 新曜社(2003)
- ・沼澤 清一 著 『子どもの笑顔で結ぶ保護者との連携』 明治図書(2006)